

一般的に禅宗が日本に弘まる前提として、中国宋代の禅宗を伝えた人物としては、京都建仁寺の開山栄西（一一四一～一二〇五）とされることが多い。その理由の一つは、現在の臨済宗十四派に建仁寺派が含まれており、形としては栄西の門流が存続しているから見得るからであろう。ところが栄西と同時期の叡山において、同じように禅に関心を抱き、相前後して禅を受法したといえる僧が存在したことも、よく知られている。一人は栄西の第一回目の後、承安元年（一一七一）に入宋し、『碧巖録』の撰者園悟克勤（一〇六三～一一三五）の弟子仏海慧遠（一一〇三～七六）に嗣法した覚阿（一一四三～？）であり、もう一人は、栄西二度目の入宋中である文治五年（一一八九）に、園悟の孫弟子である阿育王山の拙庵徳光（一一二一～一二〇三）のもとに、弟子二名を派遣した大日房能忍（生没年不詳）である。日本中世の禅宗史において、栄西だけではなく覚阿や能忍の存在も重要であること、全体的な傾向として、叡山で台密を研鑽する中で大陸の禅宗隆盛の影響を受け、禅に関心を持った僧たちによって宋朝禅が導入された結果、中世初頭は密教的色彩の強い禅が中心であり、その傾向は東福寺円爾（一二〇二～八〇）の聖一派や、由良興国寺の無本覚心（一二〇七～九八）の法燈派に受け継がれていることが、複数の研究者によって指摘されている。特に大日房能忍とその門流である達磨宗については、新出史料の紹介もあり、従来の見解が大幅に改められた。

大日房能忍と達磨宗に対する従来の評価は、能忍の示寂後その法を継承した達磨宗が後に道元（一二〇〇～五三）会下に帰投し、吸収されてしまったとされていることがある。確かに能忍の弟子覚晏（生没年不詳）が、京都東山から多武峰に拠点を移し、その多武峰が興福寺衆徒に焼き討ちされたことにより、達磨宗徒は四散したとされている。そして覚晏の弟子のうち、懐奘（一一九八～一二八〇）は早くから道元の弟子となり、越前波著寺に移錫していた懐鑑（生没年不詳）も、門下を率いて深草興聖寺（京都市）の道元下に帰投したのである。その後、道元は達磨宗徒とともに越前永平寺（福井県）に移錫し、懐鑑は道元下を離れて波著寺（福井県、現在は金沢市）に戻ったようであるが、他の達磨宗徒はそのまま道元下に残留して道元示寂後の永平寺を継承し、草創期の日本曹洞宗教団を形成したが、懐鑑の弟子である義介（一二一九～二二二五）から達磨宗の嗣書を受けた瑩山紹瑾（一二六四～二二二五）が、その他の相承物と共に嗣書を永光寺（石川県羽咋市）五老峰に埋納した時点で達磨宗の法燈は途絶え、道元門流としての日本曹洞宗に窮されてしまった、とするのが従来理解である。

ところが、浄土宗正法寺（京都府八幡市）に所蔵されていた、中国禅宗の最初期の六祖師（達磨・慧可・僧璨・道信・弘忍・慧能）の舍利（以下、六祖舍利と呼ぶ）および附属文書の紹介によって、従来は能忍示寂後の比較的早い時期に衰微したとされていた、達磨宗の拠点である摂津水田の三宝寺（大阪府吹田市、現廃寺）が、実際には応仁の乱前後までは、それなりの活動を維持していたことが判明したのである。そのことを踏まえ、現存する各種の相承物とその記録を検討した結果、これまで達磨宗の全体と考えられてきた「波著寺系達磨宗」が、じつは「三宝寺系達磨宗」から分かれた傍系というべきグループだということが明らかになったのである。

正法寺所蔵史料から推測する限り、東山から多武峰へと移錫していった覚晏の系統は、あくまで傍系であり、後に興聖寺の道元の下に集団帰投する覚晏門流の達磨宗は、けっして唯一の達磨宗僧団であったわけではない、ということが明らかである。では、覚晏の系統が三宝寺から分派したいわば傍系であるとして、波著寺系達磨宗無視してよいかというと、初期日本曹洞宗教団史が、覚晏下の達磨宗を抜きにしては語れないという意味で、依然としてその重要性は変わらない。覚晏門下の懐奘が、深草に興聖寺を開創した道元入門し、いったん門流を率いて波著寺に移錫した同門の懐鑑も、再び門流とともに興聖寺の道元会下に集団帰投する。そして、その人達によって初期曹洞宗教団、言い換えれば道元示寂後の永平寺僧団が形成されたことは間違いない。そのことは同時に、曹洞宗の中世後半の教線拡張の要因を見るとき、道元が説示した『正法眼蔵』を教学の核としつつも、各地の民間信仰を取り入れていること、今日の曹洞宗寺院において、現世利益的な祈禱が盛んに行われていることと、少なからず関係があると思われる。

今回の報告では、達磨宗の宗風を検討することで日本型禅宗の性格を考え、その達磨宗が道元門流に流入することによって、日本曹洞宗が日本禅宗としての性格を持つに至る過程を明らかにしたいと考えている。

キーワード；達磨宗・波著寺・密禅併修